

# ジーンバンク配布株の紹介③ ハプト藻類イソクリシス・タヒチ株

今回は、生物餌料サブバンク担当の水産総合研究センター瀬戸内海区水産研究所海産無脊椎動物研究センターから配布している、イソクリシス・タヒチ株 (*Isochrysis sp. (Tahiti)*) 以下、タヒチ株) を紹介します。

ジーンバンクのタヒチ株は、イスラエル国立海洋研究所から分与されたものです。タヒチ株が属するハプト藻は、植物プランクトンの仲間ですが、小型で形態学的にも識別が難しいため、分類学的研究は報告されていません。

タヒチ株は、約4マイクロメートルと、二枚貝類幼生の餌として使われてきた同属のガルバナ (*Isochrysis galbana*) に比べやや大きいのが特徴です。また、上限36℃までの高水温での培養が可能で、屋外での大量培養も容易であることから、夏季の利用にも適していると考えられます。

タヒチ株は、これまでにクルマエビ類、アサリ、マガキ、アコヤガイなどの稚エビや稚貝の餌に利用されてきましたが、不飽和脂肪酸のエイコサペンタエン酸 (EPA) 含有量がやや低いことから、栄養価は他種と比べて低いと評価されてきました。そこで、評価を

2日目より給餌を開始しますが、タヒチ株は他種に比べて小さいことからふ化後1日目より摂餌を観察されました(写真)。このため、初期成長が早くなり、最速事例では、通常着底まで20日前後かかるところが12日齢で着底する個体も現れました。

これらから、タヒチ株は稚貝期だけではなく浮遊幼生期からの二枚貝類の餌として、評価が見直されるものと期待されます。詳細はジーンバンク事業のウェブサイター (<http://nria.fra.affrc.go.jp/bank/index.html>) をご覧ください。

確認するため、二枚貝類浮遊幼生期の餌として広く利用されているパプロバルセリ、キートセロス・カルシトランス、ネオグラシールおよびタヒチ株の4種をアサリ浮遊幼生にそれぞれ与え、成長を比較しました。

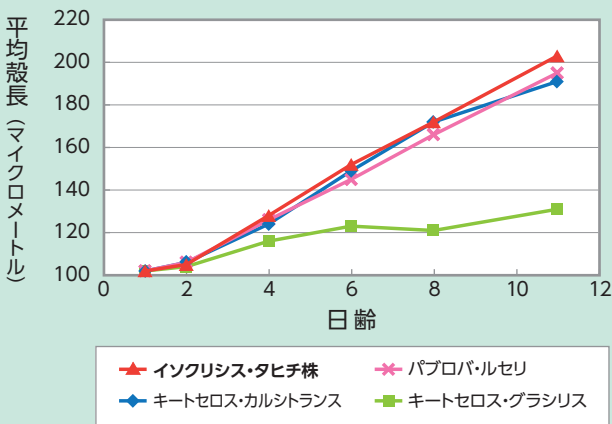


図. 4種の微細藻類をそれぞれ与えたアサリ浮遊幼生の成長の違い

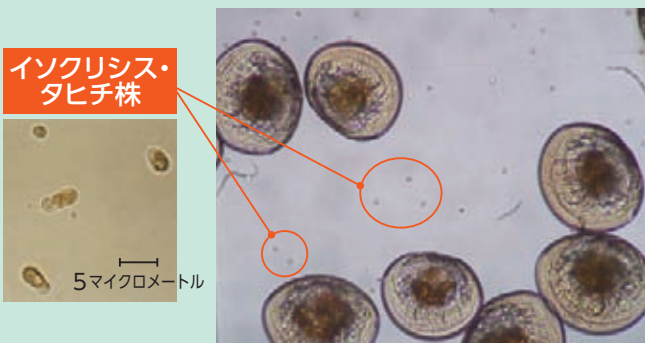


写真. タヒチ株を摂餌したアサリの5日齢の浮遊幼生  
茶色く染まった部分が胃、小さい粒子がタヒチ株  
(左写真はタヒチ株を拡大したもの)